

137 金持ちとラザロ(律法と神の国)

ルカによる福音書 16 : 14~31

▶律法と神の国 (ルカによる福音書 16 : 14~18、マタイ 11 : 12~13)

14 金に執着する (→回復訳：金銭を愛する、新改訳：金の好きな) **ファリサイ派**の人々が、この (イエスが教えた「不正な管理人のたとえ」話の) 一部始終を聞いて、イエスを**あざ笑った** (→嘲笑った)。→ファリサイ派の名称は、分離する者あるいは清い者を意味するヘブライ語に由来し、律法遵守を強調した。彼らは、神に愛されている者は金持ちになると教えていた。

15 そこで、イエスは言われた。

「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。」

16 **律法と預言者は、(洗礼者) ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている** (→民衆にとっては、イエスをメシアとして信じることはいろいろな妨害があり、まさに戦いであった)。

→律法と預言者=旧約聖書

①律法は旧約聖書のモーセ五書 (創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記) を指す。「律法」には神の民の初期の歴史と、神がモーセを通じて人々に与えた正しく生きるための諸規定が記されている。

②預言者は旧約聖書の預言書 (ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、そしてホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書の十二預言書) である。

17 **しかし、律法の文字の一画がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい。**

→ (リビング・バイブル) しかし、律法の一つでも効力を失ったわけではありません。たとえ天地が滅びようと、律法はびくともしないのです。

→一画は、ヘブライ語の文字の微小な角状の突出部分を言い、これがあるかないかで異なる文字になってしまう。

18 **妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」**

→ファリサイ派の人たちは、旧約聖書に書いていない 18 節のような、自分たちが作った口伝律法を重要視し、モーセの律法を骨抜きにしていた。イエスは、ファリサイ派の律法の曲解のたとえとして、離縁に関する教えを取り上げている。しかし、イエスは、モーセの律法はことごとく成就すると宣言された。

<・・・イエスは、ファリサイ派の誤りを「金持ちとラザロの物語」を語ることで教えている・・・>

▶金持ちとラザロ (ルカによる福音書 16 : 19~31)

19 **「ある金持ちがいた。いつも (高価な) 紫の衣や柔らかい麻布 (の下着) を着て、毎日ぜいたく (→贅沢：必要な程度を超えて物事に金銭や物などを使う意) に遊び暮らしていた。」**

20 **この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、21 その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。**

→ラザロと言う個人名が出て来ていることから、これはイエスのたとえ話ではなく、実話である。

22 **やがて、この貧しい人 (ラザロ) は死んで、天使たちによって宴席にいる **アブラハムのすぐそば** に連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。**

23 そして、金持ちは**陰府** (→狭義の「ハデス」) でさいなまれ (→苛まれ：苦しめられ) ながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。

24 そこで、(金持ちは) 大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』

25 しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。』

26 そればかりか、わたしたちとお前たちの間には**大きな淵**があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』

27 金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。』

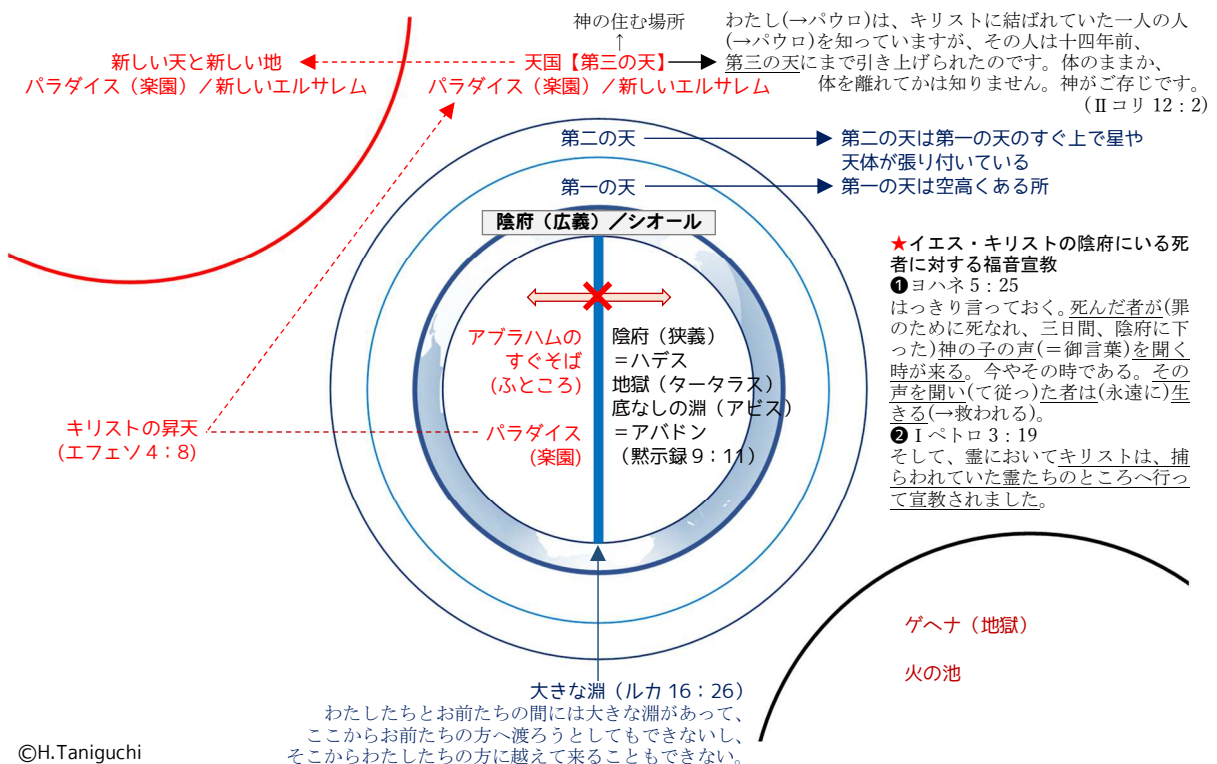
28 わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな**苦しい場所** (→狭義の「ハデス」) に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』

29 しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセ (=律法→16 節) と預言者 (=預言者の書→16 節) がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』

30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行けば、悔い改めるでしょう。』

31 アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう (→ファリサイ派を含む多くの人々は、イエスが死から復活した後でさえ、イエスの言葉を悟らないだろう)。』

【参考】旧約時代の世界観(死、陰府等) イメージ図



【参考】 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム(=ギリシア風)文化に対して否定的

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教=ファリサイ派的ユダヤ教であった。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食(週2回、木曜日と金曜日)、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者(モーセ五書<トーラー>—創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記—を研究する学者)の多くがファリサイ派に属し、聖書(旧約)の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者(ラビ rabbi)を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシーム(パルシム)」=「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

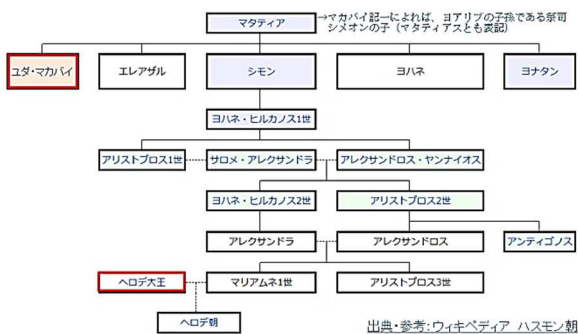
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した(ヨハネによる福音書9:22)。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった(ヨハネによる福音書3:1)。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ(マタイによる福音書26:1~5、マルコによる福音書14:1~2、ルカによる福音書22:1~6、ヨハネによる福音書11:45~57)。

エルサレム神殿の崩壊(AD70年)後はユダヤ教の主流派(神殿に拠っていたサドカイ派は消滅)となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていった。

※1: BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。



フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいく。